特集にあたって

法政大学大原社会問題研究所が，故向坂逸郎先生の生涯をかけて収集された図書・資料を，夫人の向坂ゆき氏から無償で贈与されることが決まったのは，1985年７月８日であった。そして，向坂家から研究所に，実際に図書・資料が搬送されたのは，1986年３月以降のことであった。それ以来，実に15年かかったが，この2001年３月，研究所は，『向坂逸郎文庫目録　Ⅴ　原資料』を刊行し，ここに『向坂逸郎文庫目録』全５冊がそろった。故向坂逸郎先生の図書・資料は，まだご自宅にある一部の図書・資料を除いては，整理を終了した。本誌の特集は，受贈図書・資料の整理が終わり，『向坂逸郎文庫目録』全５冊が完成した記念特集である。

＊

『向坂逸郎文庫目録』全５冊とは，『向坂逸郎文庫目録　Ⅰ　日本語図書分類順』（1992年３月），『向坂逸郎文庫目録　Ⅱ　日本語図書索引』（1993年３月），『向坂逸郎文庫目録　Ⅲ　外国語図書』（1994年３月），『向坂逸郎文庫目録　Ⅳ　逐次刊行物』（1995年10月），『向坂逸郎文庫目録　Ⅴ　原資料』（2001年３月）である。

寄贈を受けてから，最初の目録が出来るまで６年もかかったが，実は当初の見積もりをはるかに超える大変な蔵書数であったことが一番の理由である。目録第１分冊だけでも，日本語図書15,001点，21,390冊にのぼっている。第２分冊は，日本語図書を書名，著者名から検索出来るようにしたものであった。第３分冊・外国語図書は，欧文図書を分類順とし，ロシア語図書はアルフアベート順にし，さらに人名および書名索引を付けた。第４分冊・逐次刊行物は，「日本語の部」は50音順に配列し，「外国語の部」はアルファベット順とし，それに外国語団体名・人名索引を付している。

以上の第４分冊までは，分類順にしろ，50音順やアルファベット順にしろ，整理基準は立てやすいが，原資料は全く別である。結局，原資料の整理が最も遅れることになった。第４分冊を刊行して以来，さらに約５年半近くを要した。原資料は，まず戦前と戦後に分け，戦前については，向坂逸郎関係資料，堺利彦・山川均旧蔵資料のほかは，運動分野に即した整理であり，戦後も向坂逸郎関係資料のほかは，運動分野別の整理を行った。その全５冊をまとめて見た時，改めて，その蔵書の量の多さと幅の広さに驚嘆の念をいだかざるを得ない。

＊

この特集号は，そうした故向坂逸郎先生および蔵書に関連して，(1) まず，人と業績を振り返ること，(2) 主要著作を明らかにすること，(3) 向坂文庫の概要を改めて紹介することを行っている。そして，(4) この特集の一環として，向坂ゆき氏から，先生の図書・資料の収集に関わる貴重なエピソードをうかがうことができたのは，きわめて幸いであり，また貴重な機会であった。

向坂ゆき氏を初め，この特集に関わり，ご協力いただいた方々に改めて感謝の意を表明することをもって，はしがきを結ぶことにする。（早川征一郎）

向 坂 逸 郎――その人と業績

小島　恒久

生いたち
東大の学生及び研究室生活
ドイツ留学と九大及びその追放前後
『労農』への参加と地代論争
日本資本主義論争での活躍
検挙と苦難の戦時生活
戦後のマルクス主義研究
社会主義協会と左社綱領
構造改革論争とその後の協会
労働者教育と三池闘争

生いたち

向坂逸郎は1897（明治30）年２月６日，父賀禄，母小春の９人の子の長男として，福岡県大牟田に生まれた。父は三井物産の社員であった。大牟田は三池炭鉱の所在地であり，当時の人口は約17000人であった。三池炭鉱はもともと藩営であったが，維新後官営となり，さらに1888（明治21）年三井に払い下げられ，そのドル箱として発展した。だから向坂は生まれた時から，三池炭鉱とその労働者を見ながら育った。

向坂の家は代々三池藩の中級武士であり，曾祖父の老之助は，藩の経営する三山の一つ，生山坑の山係（責任者）であった。その関係で，『大牟田市史』によると，そこを「さきさか山」とも呼んだという。祖父黙爾は日田の広瀬淡窓の塾に学び，藩校修道館の教授となった。明治維新の時には脱藩して討幕運動に参加し，会津平城の戦で負傷した。維新後は農園を営むかたわら，寺子屋をひらいて子弟の教導にあたり，徳望が高かった。この祖父は向坂の生まれる１年前に亡くなったが，祖母は健在であった。父が勤務の関係で各地を転々としたので，向坂は少年時代をおもにこの祖母のもとで送った。維新の荒波をくぐって７人の子を育ててきただけに，この祖母は気丈であり，そのしつけは「武士的」できびしかった。このしつけと，祖母から聞いた維新など歴史の話が，少年向坂に知らず知らずのうちに影響をあたえたようである。

大牟田で尋常小学校４年，高等小学校３年を終えて，1910（明治43）年県立八女中学（羽犬塚町，現在の筑後市）に入学した。だが，その年の夏，父が北海道の小樽に転勤になり，小樽中学に転校した。小樽では，勉強はせず絵ばかり描いている二人の友人と仲よくなり，三人で同人雑誌を出し，向坂は作文を書いた。二人の影響でか向坂も絵を見ることが好きになり，古雑誌を買ってせっせと口絵の複製画の収集をした。そのため古本屋に借金をするようになり，父親にきびしく叱られた。

向坂の絵を鑑賞する趣味や，古本屋とのつきあいはすでにこの頃に始まっている。

小樽ではまた，近所の子供を集めて野球のチームをつくり，キャプテンをつとめた。少年小説を読みあさり，押川春浪の小説を近所の子供たちに話して聞かせたりした。後年の向坂の「寺子屋」や組織者としての素質は，すでにこの頃に芽生えていたようだ。

だが，学校の勉強はせず，こういう学業外のことにばかり熱中している向坂を見て，母が心配し，中学3年の夏，大牟田の祖母のもとに帰すことにした。そして，大牟田から近い，母の郷里柳川の中学伝習館に転校させようとした。ところが，伝習館の校長は向坂の小樽中学の成績表を見て，こういう成績不良の者はうちの学校には入れられない，といって転校を拒否した。そこで向坂は以前に入学した八女中学に転校することになった。この成績不良で伝習館への転校を拒否されたことは，しかし，向坂の発憤の転機となった。向坂はその後一念発起して，１年生の学課から勉強をやり直し，年々成績を上げて，５年の時にはクラスで１番になった。この点について向坂は後年，「ただ，転校の蹉跌から，自分のような，才能に恵まれていない男は，勉強するほかない，と決心しただけです。私になにか小さな誇りのようなものがあるとすれば，それ以後は，どんなときでも，この決心をひるがえさなかったことです」，とその自伝『流れに抗して』に書いている。

中学上級生の時，父が失職した。父は三井物産小樽支店の雑穀係りの主任として，北海道のえんどう豆などの雑穀をイギリスに輸出したが，イギリスの恐慌で値段が暴落し，会社に大損失をかけた。会社の命令でしたことだったが，父がその責任を負って辞職させられたのだ。失業した父は，退職金と借金で小さな仕事を始めたが，これもうまくゆかず，その後は職を転々として，一家は貧困に苦しむことになった。

1915（大正４）年，熊本の第五高等学校に入学した。だが，父の失業で送金が途絶えがちになり，一時は退学して就職することを考えたが，祖母の口ききで叔父が送金してくれることになり，その送金で高校・大学と学業をつづけることができた。

五高では文科乙類，ドイツ語を主とするクラスであった。そのドイツ語の教授小島伊佐美に向坂は親炙し，ドイツ語だけでなく，学問の仕方，人生の送り方を教えられた。五高時代には文学や歴史など多くの本を読んだが，とくに丘浅次郎の『進化論講話』に深い感銘をうけた。また，社会にたいする関心を喚起し，その後の進路に大きな影響を与えたのは，当時『大阪朝日新聞』に連載された河上肇の『貧乏物語』であった。これによって向坂は，貧乏とは自分一家の問題だけではなく，今日の社会の仕組みの問題であることを学んだ。とともに，これまで大学では法律学をやろうと思っていたが，経済学を勉強しようと思うようになった。

東大の学生及び研究室生活

1918（大正７）年，東京帝大の経済学科に入学した。前年にロシア革命がおこり，わが国でもこの年には米騒動がおこって，世は大正デモクラシーの時代であった。だが，期待して入った大学の講義には失望した。高野岩三郎の統計学のように感銘した講義も中にはあったが，当時の教授たちの多くはドイツ歴史学派の影響下にあって，理論的なものは少なかった。このように講義には失望したが，図書館にはよく通い，本郷や神田の古本屋にもよく行った。学外で吉野作造，福田徳三，長谷川如是閑ら当時の多くの思想家，文学者の講演も聞きに行った。文学書もよく読んだ。漱石，

鴎外をはじめ白樺派や自然主義文学など多くの作家の作品を読んだ。外国の作家では，トルストイとゲーテを最もよく読んだ。

このように大学時代には旺盛な知識欲をもって読書の幅をひろげたが，最も重要なことは，マルクス主義をいよいよ研究の中心におくようになったことであった。大学入学後，向坂は同級の宇野弘蔵と親しくなり，教室では並んで講義を聞き，二人でよく語りあった。また，アメリカの本屋から，『共産党宣言』と『空想より科学へ』の英訳を取りよせて，二人で読んだ。この２書を読んで向坂は目から鱗が落ちる思いがし，自分の一生の進むべき道はこれだと確信するようになった。そして２年生からは研究室に入ることを許されるようになったので，エンゲルスの『イギリスにおける労働階級の状態』やスパーゴの『マルクス伝』を読み，さらに『資本論』の原文を読みはじめた。

日本の社会主義者では，前記の『貧乏物語』以来，河上肇の著述や翻訳はことごとく読んだ。大学３年の時には，帰郷の途次，京都に寄って河上を尋ねたりした。しかし，ついに河上の徒にはならなかった。日本の社会主義者で最も影響をうけたのは堺利彦と山川均であった。堺編集の雑誌『新社会』や山川編集の雑誌『社会主義研究』は毎号読んだし，堺の諸著作や，山川の著『社会主義の立場から』『社会主義者の社会観』などを読んで，社会主義者の立場からする歴史や日本社会の見方を教えられた。

1920（大正９）年には「森戸事件」がおこった。その前年東大では経済学部が独立し，新進の左派系の研究者が集まりだしていたが，その経済学部の雑誌『経済学研究』の創刊号に，森戸辰男助教授の論文「クロポトキンの社会思想の研究」が載った。この論文が右翼から攻撃され，その筆者森戸と雑誌の編集発行人・大内兵衛助教授が，「朝憲紊乱」の罪で起訴され，処罰された事件がこの「森戸事件」である。これにたいし経済学部や法学部の学生たちの間から，いっせいに学問弾圧の不当をならす声がおこった。向坂はこの時経済学部の学生組織・経友会の委員であったが，この弾圧反対運動に参加し，学生集会で生まれて初めて「学問の独立」という演説をした。この運動を通じて向坂は，学問にたいする情熱を強く感じ，経済学研究を一生の仕事にしようという決意をほぼ固めたという。

1921年向坂は大学を卒業した。住友銀行に就職するか，それとも研究室に残るかと言われたが，向坂は躊躇することなく後者を選び，矢作栄蔵教授のもとで農業政策の研究助手になった。矢作教授は向坂の研究内容にはほとんど干渉せず，自由にさせてくれたので，向坂はマルクス・エンゲルスをはじめマルクス主義の諸著作を片っぱしから読むことを決意し，それを実行した。

研究室の同期には日本経済史専攻の土屋喬雄がいた。彼とはすぐ仲よくなり，よく史的唯物論について論じあった。１年後の助手には有沢広巳や大森義太郎らがおり，この二人とも親しくなった。ことに大森とはその死（1940年）にいたるまで，学問上でも社会主義運動上でも親交をつづけた。

ドイツ留学と九大及びその追放前後

1922（大正11）年春，山崎覚次郎経済学部長から，創設される九州帝大法文学部の経済学概論の講座担当をすすめられ，同時にヨーロッパ留学を約束された。向坂はマルクス・エンゲルスの祖国ドイツに行けることが嬉しく，即座にその申し入れを承諾した。留学に先だち同年10月，妹が通っ

た淑徳女学校の教師の娘・嶺ゆきと婚約した。ゆきの家はもともと高崎藩の藩医であり，その先祖には，杉田玄白の『蘭学事始』のなかで，その才能を高く評価されている嶺春泰がいる。

その年の12月末，向坂はインド洋航路でドイツに出発した。文部省の発令では留学先はドイツ，フランス，イギリスとなっていたが，パリに20日，ロンドンに３日，その他オーストラリアなどに小旅行した以外はベルリンで過ごした。ヨーロッパ留学の当初の予定は２年間であったが，関東大震災で焼けた東大経済学部研究室の図書購入の手伝いをした関係で半年延び，実際は２年半ベルリンに滞在した。

ベルリンでは，マルクス，エンゲルス，レーニンの著述をはじめとして，マルクス主義の理論家，カウツキー，ベーベル，ローザ・ルクセンブルク，ヒルファディング，メーリング，ベルンシュタイン，プレハーノフなどの著作を読めるだけ読もうと計画した。そして午前中は必ずそれに当て，午後は文学書を読んだり，ベルリン大学に行ったり，古本屋，博物館，美術館をたずねた。劇場にもよく行った。1924年１月，レーニンが亡くなった時にはドイツ共産党主催の葬送式典に出席した。

古本屋では，マルクス，エンゲルスや社会主義運動史関係の古書店として名を知られたシュトライザントときわめて親しくなり，そこでマルクス主義関係を中心として，多くの書籍，資料を収集した。当時ドイツの大インフレーションで，マルクの値が暴落していたという恵まれた条件もあったが，それだけでは足りず，シュトライザントに多額の借金をしながら本を買いあさった。この時の精力的な収集が，向坂の膨大な蔵書の基礎をなした。またそれが後，日本で世界初の『マルクス・エンゲルス全集』が刊行される時の原資料ともなった。こうしてドイツで過ごした２年半は，文字どおり「本の海の中にとびこんだような」生活であった（向坂『わが資本論』）。

1925年５月に帰国した。６月21日，婚約者・嶺ゆきと結婚し，同月末，九大法文学部助教授として福岡に赴任した。28歳であった。講義は経済学概論を担当し，翌26年に教授となった。その時の講義ノートが，後に改造社から出た『経済学全集』中の『資本論体系』（上・下）のもととなった。ゼミナールではヒルファディングの『金融資本論』を読んだ。その学生であった田中定は「その際，いろいろ文献をあげて私たちに自分で勉強するようにさせるというのが当時の先生のやり方」であったと回想している（田中定「向坂先生のこと」九大経済学部『向坂逸郎教授還暦記念論文集』所収）。

だが，この九大生活は３年足らずしかつづかなかった。1928年３月，「3・15事件」（共産党弾圧事件）がおこった。その余波で翌４月には，「大学左傾分子」の一掃が閣議で決定され，東大の大森義太郎，京大の河上肇，九大の向坂逸郎，石浜知行，佐々弘雄が左傾教授として学園から追われることになった。九大では上記の３人のほか助手の塚本三吉も辞職を強要された。これは昭和における学問弾圧の嚆矢であった。

４月末，向坂は福岡を去って東京に向かった。その車中に大森義太郎が乗りこんできて，『マルクス・エンゲルス全集』編集への協力を依頼した。当時日本では，『マルクス・エンゲルス全集』刊行の計画が二つの所ですすんでいた。一つが改造社であり，他方が五社連盟（岩波書店，同人社，叢文閣，弘文堂，希望閣）であった。そのうち改造社の方の計画の中心をなしていたのが大森であり，その大森が向坂に協力を要請し，向坂もまたそれを快諾したのだ。こうして上京いらい向坂は，

大森とともに『マルクス・エンゲルス全集』の編集刊行にたずさわり，1928年から５年の歳月をかけて，本編27巻30冊，別巻１冊，補巻１冊からなる全集を刊行するのに成功した。これは世界初の『マルクス・エンゲルス全集』であり，向坂がドイツで蒐集してきた蔵書によって実現できたものであった。

またこの『全集』と並行して，改造社は1928年から『経済学全集』を刊行したが，この『経済学全集』でも向坂は，マルクス主義関係の巻の中心的な一人として編集にたずさわった。そしてその中に『資本論体系（上・下)』や『マルクス経済学説の発展（上）・人口理論』を執筆した。

『労農』への参加と地代論争

向坂は上京とともに雑誌『労農』の同人となった。『労農』は1927年12月，山川均らによって創刊された雑誌であるが，その発刊の背景には次のような事情があった。第１次共産党の解党（1924年２月）から次の党再建にかけて，日本のマルクス主義陣営内では，無産政党の組織化をめぐって，組織論上の対立が進行した。すなわち，山川均の主張する「共同戦線党論」と，福本和夫の「結合の前の分離」という極左分裂主義的な組織論の対立がそれであった。しかも，後者の福本イズムにもとづいて第２次共産党が再建されたので，山川，堺利彦らはそれとは袂を分かち，雑誌『労農』を創刊して，その組織論にもとづく独自の運動を展開することになった。いわゆる労農派の発足である。

向坂はこの間の事情を，すでに九大時代から大森（『労農』同人）をつうじて聞いていたし，以前から堺，山川の思想に共感していたので，上京とともにその同人となり，労農派の論客として活躍することになった。『労農』誌上では主として「講話」という欄を担当し，マルクス主義の基礎的な理論を解説した。また「資本論解説」を10回にわたって連載したし，価値論争や地代論争にかんする論文などを書いた。誌上では本名のほか，南啓二，M生というペンネームも使っている。

また，『労農』は1931年，32年と，官憲の圧迫や妨害を押して，「労農政治学校」を開いたが，そこでも向坂は「マルクス主義経済学」や「ファシズムの社会的基礎」といったテーマで講義をしている。

『労農』は1931年９月，満州事変が勃発した時には，直ちに帝国主義戦争反対のアピールを発したが，発売禁止となった。この号にかぎらず『労農』は，たび重ねて発売禁止になり，財政難のため1932年６月，第６巻第５号をもって廃刊をよぎなくされた。そしてその実質上の後継誌として，32年7月から雑誌『前進』が発刊された。この雑誌に向坂は「ファシズムの社会的基礎」などファシズムに関する数篇の論文を書いている。だが，この『前進』も，ほとんどの号が発売禁止という弾圧にあい，翌33年７月，第２巻第６号をもって廃刊のやむなきにいたった。

向坂はこの『労農』『前進』だけでなく，この時期『中央公論』『改造』など一般の総合雑誌にも多くの論文を書いている。なかでも雑誌『改造』への執筆は多く，1928－37年の間に掲載された論文の数は37篇に及んでいる（関忠果他編『雑誌「改造」の四十年』)。そしてこれらの論稿をつうじて，向坂は当時の重要な諸論争に参加した。

向坂はみずから「論争の生涯」と称したように，その一生に数多くの論争をたたかった。その最初の大きな論争が「地代論争」であった。もっともそれより前，向坂は「価値論争」にも参加して

いる。この「価値論争」というのは，『資本論』第１巻の価値論と第３巻の生産価格論との論理的矛盾を衝くことによって，マルクス主義の「崩壊」を説こうとした小泉信三，高田保馬らマルクス批判者と，それに反論する山川均，河上肇，櫛田民蔵らマルクス主義者との間に展開された論争であった。が，この論争には向坂は，その終盤に登場したにすぎなかった。

この価値論争が下火になった1928年から33年にかけて，今度はマルクスの差額地代論に鉾先を向けて展開されたのが「地代論争」であった。この論争も土方成美，二木保幾ら近代経済学者のマルクス批判から始まったが，その批判点は二つであった。一つは，マルクスは『資本論』のなかで，それまで市場価値は平均的なところで決まるとのべてきた。ところが，差額地代論になると，農産物の市場価値は，最劣等の諸条件の生産物の個別的価値で決まるといっている。この「平均原理」と「限界原理」は矛盾しているというのが第１の批判点であった。第２は，このように限界的なところで農産物の市場価値が決まるとすれば，そこから生まれる差額地代は，「虚偽の社会的価値」であって，剰余価値ではなくなるではないか，という批判であった。

このマルクス批判にたいして，マルクス主義者の側から猪俣津南雄，櫛田民蔵，河上肇，林要，向坂逸郎など多くの論者が反批判の筆をとった。だが，このマルクス擁護者間にも一定の意見の相違があり，論争の重点はしだいにマルクス主義者相互の間に移っていった。この錯綜した様相を呈した地代論争のなかにあって，一中心的な役割を果たしたのが向坂であった。

この論争における向坂の主張を，まず第１の「平均原理」と「限界原理」の問題からみてみるとこうであった。一般的に市場価値が平均的なところで決まるのは，資本主義の自由競争がそこではなんの拘束もなく作用するからである。ところが，差額地代を論じるところでは，この自由競争が土地の制限的性質のために一定の制約をうける。ために，ここでは市場価値が最劣等の条件のところで決まる。つまり，最初，純粋な条件のもとでえがかれた価値法則が，より具体的な条件のもとで，一定の偏倚をうけながら貫徹していく姿がここではえがかれている。これがマルクスの方法論であって，これを矛盾というのは誤りであると主張した。第１の論争点については，この向坂の主張が紛糾する諸説を克服して，しだいに定説となった。これは地代論争が生んだ輝かしい成果であった。

第２の論争点については，差額地代分を剰余価値であるとする点では，マルクス擁護者の見解は一致していた。だが，その源泉をどこに求めるかという点では議論が分かれた。そのなかで向坂の主張は，差額地代の源泉を，社会全体の剰余価値の一部が流通をつうじて分割されたものとするところにその特徴があった。だが，この源泉については，それを農業部門で生産された剰余価値とする他方の説があり，結論をえないまま戦前の論争は終わった。なお，この地代論争にかんする向坂の論文は，その著『地代論研究』（改造社，1933年）にほぼ収録されている。

日本資本主義論争での活躍

地代論争のつぎに向坂がとりくんだ大きな論争は，日本資本主義論争（封建論争ともいう）であった。地代論争が，『資本論』そのものを対象とする純理論的な論争であったのにたいして，この日本資本主義論争はその名のとおり日本資本主義の分析を主題とする，より現実的な論争であった。しかも地代論争が，近代経済学者のマルクス批判を発端としたのにたいして，この日本資本主義論

争は最初からマルクス主義陣営内で，とくに労農派と講座派の間で展開されたという特徴をもった。

この両派の対立が，無産政党の組織化をどうすすめるかという組織論的対立に端を発したことは前にのべた。だが，その対立は1927年，共産党の27年テーゼが現れるとともに戦略的な対立に発展した。というのは，27年テーゼが日本の当面する戦略を二段階（まずブルジョア民主主義革命，その後に社会主義革命）としたのにたいして，労農派のとる戦略論は一段階戦略（ブルジョアジーの支配を倒す社会主義革命）であり，ここに両者の間で戦略論争が展開された。だが，この戦略規定は，本来日本資本主義の現状規定を前提とするものである。だから，この戦略の正否をあらそう論争はやがて，その土台をなす日本資本主義の分析や農業問題の解明にその重点を移していくことになった。こうした背景をもって展開されたのが，日本資本主義論争であったのである。

この両派の対立・論争は1932年，共産党の32年テーゼが発表されるとともに，いちだんと深刻化した。というのは，この32年テーゼはそれ以前の27年テーゼより格段に日本における封建的支配を強調したものであり，労農派との溝がさらにひろがったからである。加えて当時，この32年テーゼを基調として，日本資本主義を体系的に分析する『日本資本主義発達史講座』全７巻（岩波書店）が，共産党系の学者によって発行された。「講座派」という呼び名はこの『発達史講座』に由来するが，その主な論客は，山田盛太郎，平野義太郎，大塚金之助，小林良正，服部之総，羽仁五郎，山田勝次郎らであった。

他方，これにたいして労農派もいっせいに批判の筆をとったが，その主な論客は，向坂逸郎，櫛田民蔵，土屋喬雄，大内兵衛，猪俣津南雄，岡田宗司，伊藤好道らであった。こうして論争が本格化したが，その主要な論争の柱は次の３つであった。まず第１は日本資本主義の現段階規定をめぐる問題，第２は日本農業の特質，とくにその地主・小作関係と小作料の性格をめぐる問題，第３は明治維新の性格規定，および幕末の日本の経済発展段階をめぐる問題であった。

この論争で，講座派の見解を代表した論客は山田盛太郎であり，山田はその主著『日本資本主義分析』のなかで大略次のように主張した。日本資本主義の「基柢」をなすものは，農村における「半封建的土地所有制＝半農奴制的零細農耕」であり，この基柢の上に日本資本主義の特殊な型，すなわち「軍事的半農奴制的型制」が構築された。しかもこの日本資本主義の型制は産業資本の確立過程，つまり明治30－40年の時期に「終局的に決定」され，固定化した。

他方，この山田理論にたいして，労農派の側から主として批判を加えたのが向坂であり，その論争文は著書『日本資本主義の諸問題』（育生社，1937年）にほぼ収録されている。そのなかで向坂は，「山田氏の『日本資本主義』には発展がない」，山田は資本主義の農村におよぼす分解作用をまったく無視し，固定不変の「型制」で日本資本主義を金しばりにしている，と批判しながら，みずからの方法論をこう提示した。われわれもわが国に封建遺制が色濃く残っていることをけっして否定はしない。たんに存続するだけでなく，「今日の独占資本主義が封建遺制を必要とし，利用しつつ」あることも認める。しかしこのことから，日本資本主義の封建的「型制」を不変とは考えない。封建遺制の存在にもかかわらず，資本主義は農村にも深く浸透して，旧き封建的なものを分解し，「残存している非資本主義的階級や社会層を，資本主義の中にまきこんで行く。これが別の側面から見れば『階級的分化』にほかならない。日本の資本主義発達の分析もこの観点からなされなけれ

ばならない」。

このように向坂は，講座派の非発展的な方法論に対置して，みずからの「発展の方法」「階級分化」の視点をうちだした。この方法論は講座派の「型制」固定論よりすぐれ，マルクス主義の正道をふまえたものであった。しかも向坂は，この方法論の上に立って，さらに「日本資本主義の構造とその発展過程」を具体的，全体的に解明しようと意図していた。だが，そうした体系的叙述にいたらないまま，論争は弾圧によって「暴力的に中断させられ」てしまった（同上書，「黄土社版1947年のことば」）。なお，向坂はその意図を戦後ももちつづけ，みずからの「日本資本主義発達史」を書きたいと折にふれて口にし，またそのための史料収集も心がけていたが，ついにその希望は実現しないままに終わった。

こうした論争関係以外の向坂のこの時期の主な著作には，『レーニン伝』（改造社，1932年），『ファシズム研究』（共著，改造社，1932年），『統制経済論総観』（改造社，1934年），『知識階級論』（改造社，1935年），『現下の農村問題』（共著，時潮社，1936年）などがあり，翻訳にはカウツキー『農業経済学』（中央公論社，1932年）などがあった。この時期の向坂の研究領域が，きわめて多岐にわたっていたことがわかる。

検挙と苦難の戦時生活

だが，こうした向坂の精力的な活動も，日中戦争がはじまった1937年の「人民戦線事件」によって中断されざるをえなかった。この事件の経緯はこうであった。当時のファッショ化の進展のなかで，労農派を中心とする左派勢力は，同じく左派の労働組合全国評議会などとともに，1936年５月，「無産階級の反ファッショ政治戦線の統一」を綱領にかかげて労農無産協議会を組織し，さらに翌37年３月にはこれを日本無産党に改組した。そして反ファッショ人民戦線の形成を提唱して，当時のファッショ化の嵐のなかで，最後の抵抗をおこなった。だが，この人民戦線運動を政府は，「労農派の主義主張に基づき国体変革の意を有する」（内務省警保局『特高月報』1937年12月）ものとして，治安維持法により弾圧にのりだした。これが1937年12月の「人民戦線事件」であり，このとき労農派の理論家，日本無産党・労働組合全国評議会・全国農民組合などの幹部・活動家446名がいっせいに検挙され，日本無産党と労働組合全国評議会が結社禁止となった。検挙された主な人びとは，山川均，荒畑寒村，向坂逸郎，大森義太郎，猪俣津南雄，鈴木茂三郎，加藤勘十，黒田寿男らであった。

また，翌1938年２月には，「第２次人民戦線事件」として，大内兵衛，有沢広巳，脇村義太郎，美濃部亮吉，宇野弘蔵ら「教授グループ」を中心に38名が検挙された。この２次にわたる労農派の弾圧によって，戦前におけるわが国のファシズムと戦争に反対する組織的抵抗運動は，その最後の灯を消されることになった。

この「事件」により，37年12月15日未明に検挙された向坂は，まず玉川警察署に留置され，10カ月後に巣鴨東京拘置所の独房に移された。この獄中生活については，向坂の自伝『流れに抗して』の中で興味深く活写されている。獄中にはむろん，社会主義の本の差入れは許されなかったが，その他の本，とくに宗教の本はいくらでも入れてくれるので，この際というのでバイブルや仏教の本を随分読んだ。1939年５月に向坂は保釈になり，１年半ぶりに玉川等々力の自宅にもどった。なお，

1942年９月に出た東京地方裁判所の判決は，執行猶予つきの懲役２年であった。

保釈後は執筆禁止の状態におかれたので，翻訳で生計を立てることを考え，ラッチェルの『ドイツ』『アジア民族誌』やフライタークの『独逸文化史』第１巻（いずれも中央公論社）を翻訳出版した。だが，『独逸文化史』の第２巻以下は（訳稿はすでに出版社に渡されていたが）出版不能になった。ために友人岡崎次郎の名を借りてフリーデンスブルクの『世界鉱業論』（生活社）を翻訳出版したりした。

だが，それでは到底生活できないので，わずかな土地を借りてジャガイモなど農作物を作って生活を凌いだ。そこでも向坂の科学的探求心は遺憾なく発揮されて，土壌学，肥料学その他数多くの農業関係書を読みあさり，科学的栽培法にもとづいて，近くの農家の人が驚くような収穫をあげた。そうした戦時下の窮乏生活でも，少数の同志の温かい支援や，近隣の人々の人情の支えがあったことを，『流れに抗して』の中で向坂は懐かしく回想している。こうして戦時中，かなりのマルクス主義者が「転向」した中にあって，向坂は節を屈することなく苦難の生活を生き抜いた。

戦後のマルクス主義研究

1945年，敗戦とともに自由が回復した。向坂は戦時中の空白を埋める勢いで，理論面でも実践面でも活動を再開した。45年末九大から復職の要請をうけ，翌46年に18年ぶりに九大に戻った。九大では「経済原論」を担当し，1960年の定年まで在職して，研究を積むとともに多くの学究を育てた。また東京の自宅でも寺子屋研究会をもち，若い学究の育成につとめた。

向坂の戦後の理論的研究の重点は，『資本論』を中心とするマルクス主義の究明にあり，その成果は，『経済学方法論』全3巻（河出書房，1949～50年），『マルクス経済学の方法』（岩波書店，1959年），『マルクス経済学の基本問題』（岩波書店，1962年），『資本論と現代』（法政大学出版局，1970年），『マルクスと現代』（大和書房，1979年）などに収録されている。その内容を大別していえば，第１は，マルクス主義の世界観，すなわち弁証法的唯物論と唯物史観の研究，第２は，『資本論』でマルクスが資本主義経済を分析する際の方法論，すなわち「歴史的・論理的」といわれる方法論の解明，第３は，『資本論』とくにその第１巻の内容の分析，すなわち，価値法則，剰余価値の法則および資本主義的蓄積の一般的法則の弁証法的発展関係の究明，第４は，マルクスの思想的発展をたどり，その実践的活動をふくめた全体像を明らかにすることであり，この成果は『マルクス伝』（新潮社，1962年）として集大成された。

こうした研究をつうじて向坂が最も強調したことは，資本主義経済の発展そのものが，矛盾を累積させ，資本主義の墓掘人としての革命的階級を生みだすということであった。すなわち，資本蓄積の進展が，必然的に労働者階級の生活の悪化，不安定化をもたらし，労働者階級の反抗の増大を惹起せずにはいない。これが資本主義的蓄積の一般的法則である。こうして向坂は資本主義社会における階級闘争の必然性，社会主義の必然性を説き，この法則こそがマルクス経済学の核心であることを力説した。ここに向坂理論の大きな特徴があり，また向坂が戦後労働運動，社会主義運動の発展に力を傾注した理論的根拠があった。

向坂は『資本論』の理論的研究だけでなく，その翻訳にもとりくみ，1947～56年にわたって岩波文庫訳全12冊を出版した。また1967年，『資本論』100年を記念してその改訂訳を出した。1951年に

は『共産党宣言』を大内兵衛との共訳で岩波文庫から出版した。さらに1956年からは，大内兵衛とともに監修者となって，新潮社から『マルクス・エンゲルス選集』全16巻を編集・刊行した。

社会主義協会と左社綱領

こうしたマルクス主義の理論的研究とともに，戦後の向坂はそのマルクス主義を日本に適用し，日本の社会主義運動を発展させることに情熱を注いだ。その最初の重要な論文が，1946年９月，雑誌『世界文化』に発表した「歴史的法則について－社会革命の展望」であった。これは山川均との合意のもとに執筆されたものであり，敗戦後の日本社会の変化した諸条件を検討し，その民主主義的な諸制度拡充の意義を評価して，平和革命をはじめて提唱した画期的な論文であった。この平和革命の提唱は，ソ連共産党が第20回大会で，社会主義への移行の多様性を提起したのよりも，10年も早い先駆的な業績であり，戦後の労農派革命理論の基調となった。

一方，山川均も同年１月には，「民主人民戦線」の結成を提唱していた。こうして労農派理論は戦後，装いも新たに再出発したが，その理論の具体的展開のためには，運動の中核となる理論雑誌が必要であるというので，1947年７月，山川と向坂を編集委員代表として，雑誌『前進』が創刊された。その主要メンバーには，両名のほか荒畑寒村，高橋正雄，稲村順三，小堀甚二，板垣武男，岡崎三郎らがいた。

この雑誌を武器として，その後労農派は，その理論の社会的浸透をはかった。とくに，社会党の左派に徐々に影響力を強めた。当初右派主導だった社会党は，49年１月の総選挙で大敗を喫し，その後党の再建運動がおこったが，その中で左派の伸長がめだつようになった。その過程で起こったのが，右派の森戸辰男と左派の稲村順三との論争であったが，この論争にみるように，左派の理論的支柱に，労農派理論がすわりはじめた。

だが，1950年６月に朝鮮戦争が勃発するとともに，『前進』グループ内に意見の対立が生じた。その最大の争点は，当時の日本の再軍備問題であり，向坂，山川らが再軍備に反対したのにたいし，小堀や対馬忠行らは再軍備に賛成する態度をとった。そしてこの対立を契機として，『前進』は50年８月号で廃刊になった。

その後，向坂，山川らは社会主義協会を設立し，51年６月に雑誌『社会主義』を創刊した。その当初の主要なメンバーは，両名のほか，大内兵衛，高橋正雄，岡崎三郎，稲村順三，太田薫，岩井章らであり，山川と大内が同人代表となった。この「創刊のことば」は，その目的をこううたっていた。（1）既存の労働組合の整理を伴いつつ，組合運動の強力な全国的中心組織の確立を促進すること，（2）あらゆる分野と職域との進んだ要素を社会主義政党に組織すること，（3）労働階級の組織と運動とを，極左主義の破壊的影響から衛るとともに，右翼偏向と反階級的な勢力の動きとを克服して，階級意識を明確にし，民主主義的社会主義の方向を確立すること。

この目的に沿って社会主義協会は，朝鮮戦争勃発後の反動的な動きのなかで，社会党・総評とともに，「平和４原則」（全面講和・中立堅持・軍事基地提供反対・再軍備反対）の立場をとって運動を推進した。ところが，講和・安保両条約が締結されると，それをめぐって社会党内の対立が激化し，両条約にたいする態度の相違（左派は両条約反対，右派は講和賛成・安保反対）を直接の契機として，51年10月，社会党は左右両社会党に分裂した。社会主義協会は当然左派社会党を支持し

た。

左派社会党は，分裂後も平和４原則を堅持して運動を展開し，めざましい発展を示した。そしてその上向的発展のなかで，54年１月の大会で新しい綱領を決定した。この綱領原案の作成には，綱領委員会の幹事稲村順三とともに，顧問として向坂が中心的役割を演じた。その意味では労農派理論を基調とする綱領原案であったが，その骨子は次のごとくであった。――日本は高度に発達した資本主義国であり，独占金融資本の支配する国である。だが，アメリカの世界政策に結びつき，その経済的・政治的・軍事的支配力に依存しつつ，その従属国になっている。この現状規定からでてくる当面の戦略目標は社会主義革命であり，その方式は平和革命である。民族独立の課題は，この社会主義革命達成のなかで一体として解決されるべきものである。

この綱領原案にたいしては，左右両方から批判がおこり，なかでも民族独立を強調する清水慎三私案がするどく対立して綱領論争が展開された。その論争で向坂は，綱領原案擁護の立場から中心になって論陣をはったが，社会党大会は結局，３点の字句修正をほどこしただけで綱領原案を採択した。ここに社会党は，科学的社会主義にもとづく本格的な綱領をはじめてもつことになり，この新綱領下に左派社会党の党活動もまた活発化した。

しかしそのかたわらで，1953年半ば頃から両社会党統一の動きが具体化し，翌年になると保守陣営の動揺を背景として，その動きがさらに強まった。この再統一にたいしては，両社会党内にそれぞれ強い反対論があった。山川，向坂ら社会主義協会も，この「政権幻想」を底流にもつ，妥協的な再統一には反対し，社会主義政党の原則を堅持すべきことを主張した。だが，党の大勢は統一に流れ，55年10月の大会で両社は再統一し，新たに両社の主張を折衷した「統一社会党綱領」が採択された。一方，保守の方も同年11月に合同して自由民主党を結成し，いわゆる55年体制が成立した。

この両社統一後，これまで左社綱領の旗の下で，確信をもって運動を展開していた活動家たちの間には，社会党の右傾化に失望し，沈滞した空気がひろがった。こうした風潮にたいして向坂が書いたのが，「党風確立の基本的諸問題」（『社会主義』1958年１月号），「正しい綱領，正しい機構」（同12月号）などのいわゆる向坂論文であった。そのなかで向坂は，社会党の沈滞をなげくかわりに，社会主義理論の学習と党の強化に全力を傾注すべきことを訴え，当時の活動家に大きな勇気をあたえた。そしてその活力が，当時の警職法（警察官職務執行法）改悪反対闘争から，さらに60年の安保・三池闘争へと，運動が高揚してゆく一原動力となった。

なお，1958年３月，山川均が死去し，向坂が大内兵衛とともに社会主義協会の代表となった。

構造改革論争とその後の協会

1960年の安保・三池闘争後，日本の労働者運動には後退と右傾化の波がひろがりだした。その具体的な一つの現れが，社会党内に台頭した「構造改革論」であった。

この構造改革論を党内でまず提唱したのは江田三郎書記長（当時）であったが，彼ら構造改革派は，その路線を，「資本主義の土台である資本主義の構造（生産関係）のなかに労働者が介入して部分的に改革をかちとること」，「この部分的な変革を通じて，しだいに搾取の根幹をほりくずしていく」ことであるとした（『社会新報』1961年１月１日）。そしてこれを，国家独占資本主義の新し

い発展に対応する新革命路線として位置づけたが，これは事実上「左社綱領」路線に対立し，それを否定する性格をもつものであった。

したがって，構造改革論の本質が明らかになるとともに，それにたいする批判が各方面からおこった。なかでもその先頭に立ったのが，向坂をはじめとする社会主義協会グループであったが，向坂は，構造改革論が「なしくずし革命」論の性格をもつ改良主義思想であること，また「左社綱領」でいう「革命の客観的条件」を待機主義として否定する構造改革論は，右翼日和見主義と左翼冒険主義の危険性をもつことを，厳しく批判した。これら構造改革論を批判した向坂の諸論文は，その著『右傾化に抗して』（新評論，1981年）にほぼ収録されている。

こうして構造改革をめぐる論争がその後数年，革命論，国家独占資本主義論から，労働運動，平和運動のすすめ方にいたるまで，広範なひろがりをもって展開されたが，そのなかで構造改革論はしだいに後退をよぎなくされた。そしてこの論争に決着をつけるような意味をもって，64年の党大会で社会主義理論委員会の報告『日本における社会主義への道』が採択されたが，この報告に示された基本的な革命路線とそれをめぐる党大会の論議は，事実上構造改革路線を党の基本方針とはしないことを明らかにしたのである。

こうして社会主義協会は，科学的社会主義の立場にたって，社会党を強化するための努力を重ねてきた。ところが，この本来思想集団である協会を，実践団体（政党または党内派閥）に変質させようとする分派活動が発生した。そしてこれらのグループは，1967年６月の協会第８回大会で，協会規約第２条の修正を強行した。この規約第２条は，思想団体としての協会の基本的性格を規定しているものであるが，その中から「理論的・実践的な研究・調査・討議を行ない」という文言を削除したのだ。そこで，この削除は，思想団体としての協会を変質させるものであり，受け入れがたいとして大内・向坂両代表は代表を辞任し，ここに協会は分裂した。

その後，大内・向坂両代表は，志を同じくする人たちと社会主義協会の再建に乗りだし，1967年11月に再建大会を開いた。その再建にあたって向坂は「マルクス・レーニン主義における理論と実践」（『社会主義』再建第１号，1967年９・10月合併号）という論文を書き，改めて思想団体としての社会主義協会の性格と任務，協会員のあるべき姿を提示した。

また翌68年９月の再建第２回大会で協会は，「社会主義協会テーゼ――社会主義革命の道」を採択した。これは戦後向坂が提起した平和革命論，さらにその具体化としての左社綱領を継承発展させ，その後の世界および日本の情勢の変化に対応して作成された協会の理論的・実践的な指針であった。

こうして協会の再建は軌道に乗り，社会党や総評などの労働組合のなかに，その影響力を拡大していった。だが，1970年代，とくに石油ショック後の深刻な不況に当面して，危機意識を強めた資本側は，階級的な労働者運動の抑圧をはかり，その理論的支柱をなす社会主義協会への攻撃をマスコミなどを使って強めた。また，社会党や総評などの内部でも，協会の活動を規制する動きが起こった。こうした「協会規制」の強まりのなかで，協会は総評，社会党との折衝，合意のもとに，一定の自主改革を行なうことになった。すなわち「思想集団」としての社会主義協会の性格をより明確にするために，「社会主義協会テーゼ」を「社会主義協会の提言」と改称し，若干の字句修正を行ない，規約を簡素化するなどの改革を行なった。

だが，この「協会規制」を手はじめとして，この時期以降，社会党，総評などの活動的な層にたいする締めつけが強まり，日本の労働者運動はその後，退潮傾向を辿ることになった。

1980年大内兵衛代表が亡くなり，社会主義協会の代表は向坂一人になった。またそれ以前から，向坂自身の健康にも衰えが目立つようになってきたが，死にいたるまで代表をつとめ，日本の社会主義運動の発展に情熱を燃やしつづけた。

労働者教育と三池闘争

社会主義協会の活動とともに，向坂が戦後力を注いだものに労働者教育があった。向坂はマルクス主義を研究しただけでなく，そのマルクス主義的信念にもとづいて，理論と実践の結合を説き，つねに労働者とともにあろうとして，熱心に労働者教育にあたった。その労働者教育も，大規模な講演会から，労働組合の労働講座，さらに少人数の学習会（いわゆる寺子屋）にいたるまで，きわめて多種多様であったが，その労働者教育のために印した足跡は全国にわたった。

こうした数多い労働者教育のなかでも，最もつながりが深かったのは，三池炭鉱労働組合の労働者との学習会であった。大牟田を郷里とする向坂は，戦後九大に復帰するとともに，早い時期から三池炭鉱労働者の有志と寺子屋学習会をはじめた。その学習会のなかで育った活動家が，やがて組合の執行部に出るようになり，学習活動が組合全体にひろがるとともに，組合の強化もすすんだ。そして三池労組は職場闘争を土台として，日本最強といわれる組合にまで成長した。

だが，1950年代後半のエネルギー革命を背景として炭鉱合理化がすすみ，合理化反対闘争が各地の炭鉱で頻発した。その頂点をなしたのが，活動家を中心とする1278名の指名解雇を端緒として起こった60年の三池闘争であった。世に「総資本と総労働の対決」といわれた大闘争である。三池の労働者と深いつながりをもってきた向坂は，文字どおりこの三池闘争を自らの闘いとして，その支援に心血を注いだ。その三池の労働者と主婦会の闘いに寄せた向坂の熱い思いは，『三池と私』（労働大学，1975年）などの著述に見ることができる。

三池労組だけでなく，向坂は総評，国鉄労組，全逓，日教組など数多くの組合の労働者教育にたずさわった。また1971年をピークとして展開された国鉄労組のマル生（生産性向上運動）反対闘争の時には，反マル生調査団メンバーの一人として，東京田町電車区や北海道苗穂工場などに出向き，その不当労働行為摘発闘争を支援した。

また労働者教育という点で逸してならないのは，「労働大学」との関与である。労働大学とはもともと，1954年に当時の左派社会党の党学校として設立されたものであったが，55年の左右社会党の統一後，党学校から外郭団体に移行し，独自の運営をするようになった労働者教育機関である。その創立時から向坂は学監として，その労働者教育に指導的な役割を担いつづけた。東京をはじめ各地の労働大学の講座や講演会で，マルクス経済学や社会主義などについて講義したし，労働大学の発行する雑誌『まなぶ』や『月刊労働組合』に，ほとんど毎号のように執筆した。また労働大学から『資本論をめぐりて』『社会主義者の生活』『わが道を行く』『労働者とともに』『戦士の碑』『労働者の世界観』など，数多くの啓蒙的な著書を出版した。

さらに向坂は，青年労働者運動の育成にも熱心にとりくんだ。とくに1960年，安保・三池闘争のなかで誕生した「日本社会主義青年同盟」との関わりは深く，その機関紙『青年の声』にたびたび

寄稿するとともに，講演会や学習会に出席し，大きな影響力をもった。こうした労働者教育にあたって，向坂は，みずからの理論を第三者的，評論家的に説くというのではなく，労働者とともにあろうという熱意をもって労働者に接した。そして三池闘争のばあいに典型的に見られたように，みずからその中にはいっていって，泥にまみれて実践しようとしたところにその生き方の特徴があった。いわゆる向坂理論だけでなく，こうしたひたむきな生き方が，そのまわりにつねに若い活動家をひきつけてやまなかったゆえんであろう。

しかし，こうした向坂の生き方は，世の誤解や非難をうけることの多い道でもあった。戦前・戦中の九大追放や獄中生活は今さら言うまでもないが，戦後についても，向坂ほど世のはげしい毀誉褒貶の嵐にさらされた学者は稀であろう。戦後しばらくは左翼の人たちから「反動」と呼ばれた。逆に晩年は「極左」の名で非難されることが多かった。世の座標軸の移動につれて，その非難の方向も変わったのだ。だが，世の非難がどうであれ，向坂はみずから正しいと信じる道をつらぬこうとした。「汝の道を行け，そして人びとをして語るにまかせよ」という『資本論』中のフィレンツェ人の格言はまた，向坂の最も愛好してやまない言葉であったのである。この孤立を恐れぬ思想的節操のいさぎよさは，向坂の真骨頂であった。

こうして向坂の理論と実践の両面における精力的な活動がつづいたが，1975年頃からは体調をくずすことが多くなった。それでも健康の許すかぎりでの活動はその後もつづけられたが，1984年６月，病状が悪化して東京女子医大病院に入院，多発性脳梗塞に肺炎などを併発して，85年１月22日に亡くなった。87歳であった。マルクス主義一筋に，時流におもねることなく，強靱な意志でその生き方をつらぬきとおした生涯であった。

（こじま・つねひさ　九州大学名誉教授）

【主な文献】

・向坂逸郎『流れに抗して－ある社会主義者の自画像』（講談社，1964年）
・向坂逸郎『わが資本論』（新潮社，1972年）
・向坂逸郎『わが生涯の闘い』（文藝春秋，1974年）
・川口武彦「向坂逸郎」（『現代マルクス・レーニン主義事典・上』所収，社会思想社，1980年）
・坂本守『向坂逸郎・向坂ゆき　叛骨の昭和史』（西日本新聞社，1982年）
・『社会主義』特別号外「向坂逸郎追悼」（社会主義協会，1985年５月）
・向坂ゆき編『道は一筋　向坂逸郎を語る』（社会主義協会出版局，1988年）